

あの日、父の意識が混濁状態になって、目を剥いた時、驚き、「どうしよう。お父さん、助けて！」と父に助けを求めて、思わず病室から飛び出て行こうとしました。ここに死を迎えた父が横たわっているのだと気づき、悲しみに打ちのめされた記憶があります。しばらくは父という言葉が口にしたり、何かで父を思い出すと、人前も憚らず、嗚咽と涙がこみ上げました。私はそれほど父に甘えていたのでしょう。あれから30年が過ぎ去りました。

8月13日に、子どもたち4人とその連れ合い、また、孫家族が共に、霊園につどい、墓前で両親を偲び、礼拝を捧げました。あの時の悲しみは、この日には喜びに変わっていました。弟が神戸、妹が沖縄で働いていますので、全員が集まるのは簡単ではありませんが、それぞれ都合をつけて集まりました。墓前では妹が、父と母の生涯を走馬灯のように次々と思い起こさせる話をしてくれました。

両親は大平洋戦争に突入し、教会が教団として統制を受ける時期に牧師となり、特高に監視され、自由に福音を語れない苦渋の時を過ごしました。父は日本の敗戦は戦争に協力した教会への神の裁きであると受け止め、懺悔しました。そのため戦後すぐに、辺境の地である青森県五所川原町にある、教会員のいない廃屋のようになった教会に赴き、一から信仰生活、伝道生活を始めました。

五所川原では貧しい家庭の子に目を向け、保育園の活動を広げました。父親にも子育てに関心を持ってもらえるよう、父母会を盛んにしました。教育が未来を作ると信じたからでした。また封建的な意識が強い農村で、青年たちを励まし、学びと交わりの場を作り、伝道の足掛かりを作りました。西北二郡に家庭集会の拠点を見つけては、自転車で、冬には雪道を徒歩で通いました。

東京の下谷教会に赴任した時には、金の卵と呼ばれた農家の次、三男の住み込み労働者が教会にかなり来ていました。農村地帯から赴任した牧師として、彼らの成長と安定のために、父親のようになって、共に生きました。現在、教会の役員として教会を支えているのは彼らです。更に、都会には夜の世界で働き、相談する人もなく、孤独な人々がいる事にも目を向けました。ドイツの教会のミッドナイトミッション活動から学び、匿名で相談できる「東京いのちの電話」を開設し、働きました。

各教派が教団としてまとまったことを別の意味で喜び、キリストが必ず導かれるのだから、一つとなって、働くことをいつも願って、教会をなによりも大切に、教会第一が父の姿勢でした。父は自分自身に語りかけられた神の恵みの招きを語らずにはいられない説教者でした。

父の生涯を思い起こすと捨てられているような人々に目を向け、共に生きられる世界を目指したと思わずにいられません。それは父自身の生い立ちに根差した願いでもあったからです。父は恩師からいただいた色紙「うそいふな/ものほしがるな/からだいたはるな」を座右の銘にしていました。真実に生き、物欲を避け、命を惜しまず働くことが理想だったのでしょ。

私たち子どもは両親のもとでこの上なく愛されて育ったこと、何よりも大事な宝として信仰を教えられたことが、今を生きる力になっています。それぞれが教会で伝道、奉仕、教育に関わって、生き生きと過ごしていることを、改めて思い返す記念会でした。このような父の子に生まれたことを心から嬉しく思い、感謝と追悼の思いで過ごしました。

